

# 高校生・大学生のための国際キャリアアップシリーズ

## Chapter 9 : グローバルキャリアをめざす人のための参考図書

この Chapter では、実務を重ねた先生方から、グローバルキャリアを目指す方々への参考図書をあげてもらいます。まず、東洋学園大学の横山和子先生（元 UNHCR、FAO 勤務）がご推薦の参考図書から始めましょう。

### 国際公務員志望者向け参考図書（横山和子先生；東洋学園大学）

今井正幸『入門国際開発金融』亜紀書房、2001。

世銀、アジア開発銀行に興味のある方に薦めます。

国連開発計画『UNDP 人間開発報告書』

指数を使い、人間の開発度を測定した報告書。毎年テーマを変えて出版されています：「人間開発の概念と測定」（1990）；「人間開発の財政」（1991）；「人間開発の地球的側面」（1992）；「人びとの社会参加」（1993）；「人間の安全保障の新しい側面」（1994）；「ジェンダーと人間開発」（1995）；「経済成長と人間開発」（1996）；「貧困と人間開発」（1997）；「消費パターンと人間開発」（1998）；「グローバリゼーションと人間開発」（1999）；「人権と人間開発」（2000）；「新技術と人間開発」（2001）；「ガバナンスと人間開発」（2002）；「ミレニアム開発目標（MDGs）達成をめざして」（2003）；「この多様な世界で文化の自由を」（2004）；「岐路に立つ国際協力：不平等な世界での援助、貿易、安全保障」（2005）；「水危機神話を越えて：水資源をめぐる権力闘争と貧困、グローバルな課題」（2006）。「気候変動との戦い：分断された世界で試される人類の団結」（2007/2008）；「障壁を乗り越えて：人の移動と開発」（2009）；「国家の真の豊かさ：人間開発への道筋」（2010）；「持続可能性と公平性：より良い未来をすべての人に」（2011）；「南の台頭：多様な世界における人間開発」（2013）。なお、英語版もあるので、海外の大学院に進学することを計画している人には、日英版両方読むことを勧めます。

国際協力 NGO センター『国際協力 NGO ディレクトリー』

日本にある NGO 団体の概要、目的、事業内容、組織、財政などを団体ごとに要約したもの。書店で販売していないので上記センターへ直接連絡すること。

国際開発ジャーナル社『国際協力就職ガイド』

国際協力の分野で就職しようとする人を対象にこの分野での就職情報をコンパクトに提供しています。特に、開発コンサルタント会社、ODA 関連援助機関 {JICA, JBIC (国際協力銀行) 等} の情報が豊富。隔年発行。

L・リーニム『セックス「産業」：東南アジアにおける売春の背景』日本労働研究機構、1999。

売春に従事している児童労働者の実態をアジアの 6 カ国比較調査という形にまとめた良書。現在、ILO を中心に児童労働撲滅運動が積極的に展開されていることから、国際問題、労働問題に興味がある人に読むことを勧めます。

西野桂子『最新版 国際公務員を目指す留学と就職』アルク社、2001。

海外への留学情報が豊富に掲載されています。

西崎真理子『国際協力を仕事として』弥生書房、1995。

人道援助の仕事に就いている 30 代の日本人女性 12 人の体験記。援助とは？、途上国での仕事とは？などを力強いタッチで語っている。国際協力の分野で働きたいと考えている人には是非読んで欲しい 1 冊。

田所昌幸『国連財政』有斐閣、1996。

国連の予算システムを詳細に記述している本。

横山和子『**国際公務員になるには**』ペリかん社、2009。

国際公務員志望者への手引き書。5人の現職国際公務員の生活紹介、国際機関での仕事の概要、適性、選抜方法等を記述しています。

横山和子『**国際公務員のキャリアデザインー満足度に基づく実証分析**』白桃書房、2011。

英語版は“Human Resource Management in the UN: A Japanese Perspective”、電子書籍版と書籍版があります。

横山和子『**青年海外協力隊員になるには**』ペリかん社、2013。

国際支援志望者への手引き書。協力隊を支える仕組みや制度、実際の生活と収入、適性などを整理して記述しています。

ムハマド・ユヌス『**ムハマド・ユヌス自伝**』早川書房、1998。

貧しい農村女性に小口の融資を行なうバングラデシュ・グラミン銀行を創設した著者の自叙伝。社会的弱者を救済するための事業を開始・実行することの困難とその成果を自伝という形で紹介しています（文庫版もあります）。

## 外交などについての参考図書（井上一郎先生）

細谷雄一『**外交 多文明時代の対話と交渉**』有斐閣、2007。

外交の発展を歴史的に説明しており、入門書として読みやすい。

北野充、金子将史編『**パブリック・ディプロマシー「世論の時代」の外交戦略**』PHP研究所、2007。

パブリック・ディプロマシーをわかりやすく解説。

神余隆博『**多極化時代の日本外交戦略**』朝日新書、2010と柳淳『**外交入門 国際社会の作法と思考**』時事通信社、2014。

この2点はいずれも元・現役外交官による日本外交の実務家の視点からの著書。

H・ニコルソン『**外交**』東京大学出版会、1987。

外交について書かれた書物としては定番。古典なので読みづらいところもあるかも知れませんが、外交官になったら（あるいは目指すには）一度は目を通す本といわれています。

塩野七生『**海の都の物語 ヴェネツィア共和国の一千年**』新潮文庫、2009。

外交の本ではありませんが、本文で触れた海洋国家ヴェネツィアの歴史を鮮やかに描く。示唆に富み、面白い。

## 『総政の100冊』より、国際関係の本について

庄司克宏『**欧州連合ー統治の論理とゆくえ**』岩波書店、2007。

毎日のように新聞やTV等マスメディアに登場するEU（ヨーロッパ連合）は、誰もが知っているようで案外わかりにくい機構の一つです。この本は、すでに日本語で数多く出版されている文献の中でも、EU研究者が一般読者向けに書いたもので、ヨーロッパに関心のある学生さんの必読書です。EUの実態について、設立の経緯、組織構造と運営、活動の多様化などを中心に学ぶことができます。また最終章では、東アジアの経済統合との関連で、地域における日本の役割にも言及しています。

羽場久美子・増田正人編『**21世紀国際社会への招待**』有斐閣、2003。

今後どのような専門分野に進むにしても、国際社会についての基礎知識は必要です。この本は、総勢23名の執筆陣が、さまざまな研究領域（国際政治・経済、社会学、環境学、地域研究、近現代史など）から国際的な諸問題を詳しく解説した入門書です。各章は簡潔で読みやすいので、まず第I部（第1～5章）で、現在の国際社会がどのように形成され発展してきたかについて理解を深めたいと、興味のあるテーマから読み進めるとよいでしょう。巻末の「国際社会キーワード200」も、活用してください。

B・アンダーソン『**想像の共同体**』書籍工房早山、2007。

「国連」は、いうまでもなく” the United Nations”。では、「ネイション」とは何か？ 著者は「国民（ネイション）とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」と定義する。国民という概念は国家が創りだし、人々に押しつけたものではない。「たとえ現実には不平等と搾取があるにせよ、国民は、常に、水平的な深い同志愛として心に思い描かれ」、「数千、数百万の人々が、かくも限られた想像力の産物のために、殺し合い、あるいはむしろみずからすすんで死んでいった」。推薦本は、この国民という概念が、いつ、どこで、どのようにして生まれたのかを明らかにしたもの。どこで生まれたのか？ 「欧州」と答えた人は間違い。正解は読んでのお楽しみ。上質な推理小説を読んでいるかのような知的興奮。読後しばらくはアンダーソン・マジックの術中から逃れられない。

鶴見良行『**バナナと日本人**』岩波書店、1982。

バナナを通して、フィリピンと日本の間の社会・経済関係を社会科学的アプローチであぶりだした名著である。この本はなかなか読みきれない。新書なのに手ごたえがありすぎる。しかし読後はきっと他の視点でものを見ている自分に気がつくであろう。

明石康他編『**日本と国連の50年**』ミネルヴァ書房、2008。

1956年に日本が国連に加盟してから50年の節目にあたり、日本を代表して、あるいは国連諸機関の責任者として活躍した方々の講演を収録しています。それぞれの講演に先立ち、時代背景について解説があり、講演後には質疑応答が行われています。各人の貴重な体験は、国際社会に貢献することの意義や困難について考えるうえで、たいへん示唆に富んでいます。

## 『総政の100冊』より、政治関係の本について

酒井哲哉『**近代日本の国際秩序論**』岩波書店、2016。

第1次世界大戦後から太平洋戦争敗戦まで、日本の国際政治学者たちは、どのように国際秩序を考えていたのであろうか？ すでに、大日本帝国陸軍のエリート軍人たちが、近代世界秩序としてのイギリスの世界支配、さらにウィルソン米国大統領による世界秩序像（その典型は国際連盟）を破壊し、新しい世界秩序を模索していたことはよく知られている。しかし、学者たちは、どう見ていたのであろうか。いや、それ以上に、かれらは軍人たちの行動（侵略的軍国主義）を肯定する国際秩序像を提出していたのか、それとも、学者たちは軍人たちを学問でコントロールしようとしていたのか？ この重要な問題に答える前に、とにかく、酒井先生の研究は、東京帝国大学系の学者たちを中心にして、かれらはまず世界をどう分析し、何をすべきと考えていたかを淡々と描いている。もちろん、西田を中心とする京都学派を無視して、上記の重大問題に答えることはできないにしても、酒井先生の研究は日本の学問と戦争という古くて新しい問題を考えるうえで不可欠である。

朝河貴一『**日本の禍機**』講談社、1987。

こんな日本人がいたのかと感動を覚える書。筆者は米国の名門エール大学で教授を務めた日本人で、今から約100年前、日露戦争に関して日本の立場を米国に説明し、その後、米国など欧米世論を踏まえて日本に自重するよう警告を発し続けた。当時の日本の状況を考えれば、これがいかに勇気のある行動か想像して余りある。現在、筆者ほどの知性と行動力を備えた人物はいるのだろうか。やや難解なところもあるかもしれないが、じっくり味わう価値がある。

五百旗頭誠編『**日米関係史**』有斐閣、2008。

『日米関係史』—これは、有名なペリー提督率いる米国艦隊が浦賀に来航してから今日に至る、日米関係を通史として概観したものである。この分野において、いろいろな日米関係史が書かれてきた。しかし、これほどの学者を集め、生きのいいすなわち学界の最先端の議論をふまえて、書いたものはすくない。執筆者たちは3年余の時間をかけ、何度も合宿までして書き上げたものである。日米関係を議論する前提として、この本ぐらいいは読んでいないと、そもそも議論する資格があるのかと言われかねない。

戸部良一『**日本の近代9 逆説の軍隊**』中央公論社、1998。

これまで、近代日本の軍事史の通史といえば、藤原彰先生や小山弘健先生の研究が有名であった。ただ、書かれた時代をふまえると、左翼的な論調は避けがたいものであった。戸部先生の研究は、かなり中立的な立場から、しかも社会学的分析をふんだんに使用したものである。近代日本の軍事史を学ぶこ

とは、近代日本を理解することにつうじる。よき出発点として薦めたい。

飯尾潤『日本の統治構造：官僚内閣制から議院内閣制へ』中央公論社、2007。

政治や行政の在り方について分析、解説、提言の類は多いが、本書ほど広い層にインパクトを与えるものは少ないのではないか。「官僚内閣制」から真の議院内閣制へ——が筆者のメッセージである。それが説得力を持つのは政治学の理論と歴史、そして現実の政治過程についての豊富な知識に支えられているからであろう。政治や政府に関心を持つ人には必読と言える。国際比較の視点もあり、さまざまな角度から読めるであろう。政治や行政に関する「常識」は筆者によって、簡単に覆されてしまう。その知的挑戦には学ぶべきところが多い。

## 教養としての歴史

E.H.カー『歴史とは何か』岩波書店、1962。

徳川家康でも豊臣秀吉でも、ナポレオン皇帝でもよい、歴史上の人物を考えてみよう。彼らについて書かれていることは、本当に事実なのか。いろいろ書かれていることの、どこに真実があるのか。そもそも「事実」とは何なのか——。こうした疑問に、筆者は丁寧に答えてくれる。筆者は歴史家だが、その指摘は、多くの学問分野に参考になりそうだ。難解なところもあるが、何度も読むうちに筆者の思いが伝わってくるであろう。本書はケンブリッジ大学での講演がもとになっている。その翻訳の素晴らしさも味わってもらいたい。

ブルターク『ブルターク英雄伝』岩波書店、2004。

「対比列伝」が元の書名で、古代ギリシャと古代ローマの著名人を似たもの同士を対比して論評した伝記ものです。推薦する理由は、

1. 個性的な実在の人物を歴史的場面の中で描いているわけですから、ともかく面白いです。
2. 人生の教訓を学ぶのに役立ちます。これからの人生が定まっていない若者にとって、時代が異なるとはいえ人間社会は変わりないですから、彼らの生き様を知ることは、特にためになるでしょう。
3. 欧米の人たちにとっては、この本に描かれた人物や歴史上の出来事は一般的な教養であり、いわば常識化しています。

これから海外で活動しようという若者として、欧米人との親しい交流をする上で、この本を読んでいないことは恥ずかしいことでしょう。

J.M. Roberts (2014) “The Penguin History of the World” Penguin Books

Oxford 大学の J.M. Roberts 教授の手による『ペンギン世界史』を手にしたのはワシントン D.C.の空港であった。多分、2001年の春ごろだと思う。仕事が終わりにマニラに帰る長いフライトの時間を有効に過ごそうと考えて本屋をあさり求めたのがこの本であった。飛行機の自分の席に着くなり、本を読み始めた。何と言う本だ！これはスリラー小説ではない。なのに本を置く事が出来なかった。成田までずっと読み通した。隣のアメリカ人が、「何をそんなに夢中になって読んでいるのか」と言ってきた。「この歴史の本は素晴らしい。この地球上の人類の歴史を太古から現代まで、すごく読みやすく、でも読んでいる者を離さず、ずうっと物語の中に引き込んで行くんだ」。「そんなこと言うっても歴史の本なんだから他の本と同じで、無味乾燥で時代を追って行くだけだろ」。そうではない。この本はまさにグローバルな視野と重要な出来事を漏れなく横の関係を正確に押さえながら叙述を展開してゆく。その包括性には脱帽する。混乱する世の中、社会の発展・変革、権力闘争と、その権力者の交代、文化・文明の興隆と衰退を経て出来上がってきた我々の現代を絶え間ない過去の大きな流れの中で捉えてる。ぜひ、皆さんに読んでもらいたい。

2018年3月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部